

日光で国立公園を考える

身近だからこそ、理解したうえで楽しもう



永山悦子さん



小野寺浩さん



宮地信良さん



親油素子先生



今回のフォーラムは、小杉放菴記念日光美術館の国立公園絵画展覧会の開催にあわせて実施された。この美術館は日光が国立公園になるさい尽力した画家の小杉放菴没後、親族により作品が日光市に寄贈され、それを展示するために小杉放菴ゆかりの地である日光小学校の跡地に造られた美術館である。この美術館自体も国立公園の中に建てられている。

6月25日に小杉放菴記念日光美術館にて「国立公園フォーラム2016 21世紀の国立公園、そして日光―絵画の風景から未来へ―」(小杉放菴記念日光美術館・江戸川大学国立公園研究所主催)が開催された。

パネラーは、江戸川大学国立公園研究所長の親泊素子先生、(公財)屋久島環境文化財団理事長の小野寺浩さん、毎日新聞・前科学環境部副部長の永山悦子さん、(有)自然計画代表取締役の宮地信良さんの4人。

様々な角度から国立公園をみてきた専門家たちが「国立公園の抱える課題やその活用、また日光の未来像」をテーマにディスカッションを行った。

まず、日光での問題がとりあげられた。温暖化や人為的な自然環境の改変、シカやサルが増加が問題化している。野生生物は増えすぎると、生態系が崩れ、自然景観に大きな影響を及ぼす。

観光客や修学旅行生の増加も渋滞を招いている。車だけでなく、木道の狭さで利用者の増加で人の渋滞も起きている。東武バスが世界遺産バスを運行したり、環境倉が戦場ヶ原の木の道を幅を広くするなど利便性の向上を目指して対策が取られているが、未だに渋滞は緩和されていない。また、長年の施設の利用による老朽化も指摘された。

次は、国立公園の管理体制のの違いについて。アメリカでは原則として国が土地を保有し、管理を任されている。そこに人が住むことはなく排除され、利用には入園料がかかる。

日本では風景美を保全するため、土地所有にかかわらず公園の指定をする。そのため、土地所有にかかわらず公園の指定をする。そのため、土地所有にかかわらず公園の指定をする。そのため、土地所有にかかわらず公園の指定をする。

地域に溶け込まずに日本での課題は、身近に存在しているがゆえに人々の認識が薄いことだ。

国立公園は日本の自然の豊かさを象徴してくれる景勝地である。しかし遊園地などのような商業的な観光地とは異なる存在でなくてはならない。専門家の立場からの意見としては、国立公園にただ物見遊山で観光客が訪れることは、必ずしも好ましい傾向とは言えないようだ。

国立公園は何も知らずに訪れて楽しめる観光地という訳ではない。国立公園とは何なのか、そしてその現状を理解したうえでこそ楽しむことができるのだ。

(撮影・取材・文・長谷川大成 山本新也)